

第5回 ALL 鎌倉 鎌倉市長・七ヶ浜町長対談_議事メモ

日時 : 2017年3月12日(日) 11:30~12:00

参加者 : 鎌倉市) 松尾崇市長 秘書広報課ご担当者
(敬称略) : 七ヶ浜町) 寺澤薫町長、七ヶ浜国際村) 鈴木裕治 事業係長
: 七七支援隊) 中里成光、森田智子、山口貴大、丸山菜穂子(記)

●全体の流れ

- ・ご挨拶
- ・贈答品授与
- ・記念撮影
- ・対談

●対談内容

<震災6年目を迎えて>

- ・昨日(2017年3月11日)で震災から6年目を迎え、町では国際村にて追悼式を行ったところである。これまで七七支援隊をはじめ、多くのボランティアの方々にご支援いただいた。6年が経過し、お蔭さまでインフラ面での復興は大分進んできたところである。(寺澤町長)

<ALL 鎌倉のイベントについて>

- ・ご多忙の中、鎌倉までお越しいただき、感謝申し上げます。(松尾市長)
→日程的になかなか来ることができなかったので、今回参加できて良かった。
ALL 鎌倉のイベントは、話には聞いていたが、実際見ると盛大で驚いた。
また、鎌倉の観光客の多さにも驚いた。非常に賑やか。
このように多くの人が集まる場所で防災広報、東北の物販、Groove7やNaNaの舞台があり、防災への興味を深め、東北や七ヶ浜のことを広く知ってもらえるイベントだと感じた。(寺澤町長)

<七七支援隊の活動について>

- ・震災当時、多くのボランティアの方々に助けていただいたが、支援隊には6年目になった今でも継続的に活動をしていただいております、復興の力になっている。深夜バスを走らせ、30回を超える遠方の町への訪問はなかなかできるものではない。支援隊の息の長い支援は、七ヶ浜でも知っている方が多い。
何より、忘れずにずっと通ってくれている、ということが嬉しく、町民の力になっていると考える。(寺澤町長)
→こういった民間交流を機に、七ヶ浜町とはパートナーシティ協定を結ぶことができた。(中里)
→今後とも末永いお付き合いをお願いしたい。(松尾市長)

<海開きについて>

- ・昨年(2016年)夏に、震災5年目にして初めて海開きをすることができた。
町の名所の1つである菖蒲田浜が、10日間限定ではあったものの再度海水浴場として復活できたことは、とても感慨深かった。
今年はまだ少し長い期間海水浴が楽しめるようになる。(寺澤町長)
- ・菖蒲田海水浴場は明治時代に開設された東北初の海水浴場。
開設当時はまだ海水浴場が全国に数えるほどしかなかったが、菖蒲田海水浴場は、鎌倉の由比ガ浜海水浴場を視察し、手本にした聞く。(寺澤町長)
→もちろん存じている。双方の海岸の地形が似ていることもあったかもしれない。(松尾市長)

<セヶ浜町の現在>

- ・町の仮設住宅については、今年(2017年3月)中に全住民の高台住宅団地、災害公営住宅への移転が完了予定で、月末に仮設の閉所式を行う。
閉所式には、中里さんを招待している。(寺澤町長)
→先日、仮設住宅がなくなった場所が元のグラウンドなどに整備されたのを見てきた。
仮設住宅を拠点に活動していた支援隊員としては少し寂しい気もしたが、一方で、町の方が「元の姿に戻った」と喜んでるのが印象的だった。(丸山)
→海水浴場も含め、町が徐々に元通りになっていく姿は、町民にとっては嬉しいものである。(寺澤町長)
 - ・移転計画に関してはどのような配慮があったのか。(松尾市長)
→できるだけコミュニティを維持できるよう、震災前に住んでいた地区単位にまとまって、近い場所に移転できるよう配慮した。
しかし、被災したエリアには小さな単位の集落もあり、複数地区を集めた移転場所もある。
仮設住宅や移転などにより、被災した方々は新しいつながりを築いても、すぐにリセットされてしまう状況が続いた。
新しい土地においては新たなコミュニティづくりが必要だが、簡単なことではない。
今後、支援隊の方々にも協力いただきたい部分と考える。(寺澤町長)
 - ・他、集団移転場所には町民バスの巡回ルートを確認する配慮が必要だった。(寺澤町長)
→町民バスはやはり重要であったか。(松尾市長)
→車を持たない高齢の方が多く、国道も鉄道もない土地柄、買い物などで町民バスを頼りにしている方が多かった。
地域全体で支えるまちづくりが必要である。
現在バスは公営住宅を巡るルートで多賀城駅などを結び、住民の足となっている。(寺澤町長)
-

<七ヶ浜町の復興と当時の対応>

- ・住宅復興支援や、沿岸部の修繕など、七ヶ浜町は他の被災地域に比べて、町の再建が早く進んでいる印象を受ける。(丸山)

→震災後の数カ月間は混乱を極め、やることが山積みだった。

自分の家が被災している職員もいる中で、前例のないあらゆることに対処してかなければならなかった。

スピードが求められる中、一刻も早く物事を進めるために、当時の渡邊町長の判断により各職員に権限が委譲された。

物事の決定は、その場その場にいる各職員の判断に任せ、町長には事後で報告を行う方式で進めていった。

そういった当時の臨機応変の対応が、町の復興の早さにつながったのかもしれない。(寺澤町長)

<熊本地震に際して>

- ・昨年(2016年)4月に発生した熊本地震では、(人口規模の近い)御船町から相談の電話があった。何から手を付けたらよいか分からず困っているとのことだった。

熊本から七ヶ浜町に支援をいただいたこともあり、

我々の経験が少しでも役に立てばと、翌月5月に職員を2名派遣、復興協力した。

しかし、あのような有事の際には、これが絶対といったマニュアルはなく、

その場に応じた臨機応変な対応が併せて必要となってくる。(寺澤町長)

→熊本を支援した方からは、例えば、ガレキの種類が東北とは違った、と伺った。(丸山)

→津波の被害と、揺れによる被害では、被害状況も異なる。

ガレキの種類も違えば、それを片付ける手段も異なってくる。

東北の経験が役立つことも多いと思うが、その土地土地ならではの

新たな課題や問題が少なからずあると感じた。(寺澤町長)

→鎌倉が困った時も、七ヶ浜町の対応事例を元に、是非ご支援いただきたい。(中里)

→もちろんである。今後とも互いに協力していきたい。(寺澤町長)